



## 人が共に育ちあう場に寄り添いながら

園長 野中 泉

11月の終わりになり、今年も来年度の保育所申請の季節になりました。在園児の申請は園で行うので、私たちが役場の窓口業務を代行して、お父さん、お母さんの就労証明書を受け取り、希望保育時間や家庭状況などを聞かせてもらいます。日頃から、他所に比べたらそれぞれの家庭背景を知っている保育園だと自負しているのですが、それでも日々の行き帰りに立ち話するだけでは、知らないことも多いなと思わされるのもこの時期の常です。「実はお腹に赤ちゃんがいるんです」とうれしい初告白を聞くこともあれば、「来月には離婚届を出そうと思っているから、申請はひとり親にすればいい？」とびっくりするような告白を開口一番に聞き、「なに、なにどうした？」と慌てて事情を聞くこともあります。ご家族の深刻な病気のことを聞き一緒に涙することもあるし、思いもよらないような厳しい家庭状況に陥っていることを全く知らずにいて、その場で絶句することもあります。

申請期間の前には、事務の担当者が申請書の書き方のレクチャーを役場から受けるのですが、それでも、既定の用紙には書けないような込み入った事情の家庭が毎年あり、『特例』のそのまた『特例』を役場に問い合わせることも少なくありません。改めて保育園は、子どもの成長を見守るだけでなく家族の人生にまろごと寄り添っていく場所なのだと再認識するし、人にはその人生の数だけ事情が様々にあるのだと、あたりまえのことをもう一度深く考えるのも、毎年のことです。

笑い話ですが、ほんの数か月前にこんなことがありました。年度途中で他市に引っ越しをした家庭があり、当初はそのまま転園するという話だったのですが、ある日の夕方事務室にいた明子（林事務員）さんと私に、「悩んでるんですよ。クラス先輩お母さんに聞いたら、アトムみたいな保育園は他にないっていうから。他の園とアトムは、そんなに違いますか？」と話しかけてきたお母さん。若い彼女たち夫婦の揉め事には、何度か首をつっこんできた私が「そうやねえ……。どうやら？でも、少なくとも、他の園は夫婦喧嘩の仲裁には入らないかもね」というと「えー、そうなんですか？じゃあ、アトムに残ろうかな」と心底びっくりしたような顔で言うお母さん。その反応に明子さんと私は「そこ？」と思わず笑ってしまったのですが、そういえば、記念誌にも載せた座談会に来ていたある先輩のお父さんが「嫁と喧嘩した翌日は、おっちゃん（当時の市原園長）が事務室からちよっとおいでと手招きしていて、嫌やったなあ」と話していたことも思い出します。「嫌なのに、保育園変わろうと思わなかったの？」と私が聞くと「保育園はアトムしか知らんから、保育園って子どものことだけじゃなくて、夫婦のことにも口出ししてくるところなんやなあと思ってたから、しゃあないなあ」と答えたお父さんにその場にいたみんなが大爆笑しました。でも、その後で「アトムじゃなかったら、別れてたなと思う。若い俺ら夫婦も、ここで怒ってもらったり、励まされたりして大人になった」と続けたそのお父さんの言葉も同時に思い出します。

「保育園は生活の場」。ことあるごとに、前理事長の市原が言っていた言葉です。だから子どもたちへの保育は、学校のように一律に指導するものではなく、ひとりひとりの持ち味に寄り添い援助するものだと考えてきましたが、それは、大人も、そして園長である私自身も同じだなと覚えることが年々多くなっています。子どもたちは、人の群れの中で育っていきます。自分とは違う者同士が触れ合いながら育っていくのですから、時には傷つけたり、傷つけられたりもします。反対に励ましたり、励まされたりもする。そんなふうに、あっちこっちに、揺れながら、ぶつかりあいながら、一見無駄とも思えるような時間を費やしながらか育っていくのです。そして、きっと私たち大人もそれは同じです。人間くさく、面倒くさいこの「生活」との向き合い、つまり自分以外の誰かに翻弄されたり、時に道に迷ったりしながら奮闘するこの日々を通して他者と共に育ちあっている。アトムが他所と違うことがあるとしたら、そんな「人が育ちあう力」を、大まじめに信じ続ける保育園であることです。